

登龍門通信

博士課程教育リーディングプログラム（オールラウンド型）

No. 8 / August 3/st, 2017

モンゴル2017年春研修 ～ウランバートルの大気汚染解析と対策案～

本研修は、大気汚染物質を取り込んだ雪試料を化学分析し、ウランバートルの大気汚染実態を考えるものです。この野外自然科学と社会科学が融合した教育スタイルは、国際的に注目されています。毎年の研修の結果、5シーズンにわたるデータが蓄積され、都市計画なども提案されてきました。以下が3月に第4期生を対象に行った研修内容の概要です。

3月3日（金）、第4期生9名と教員2名はウランバートルに夕方到着。貸し切りバスにてホテルへ向かう道中、成長著しいウランバートルを実感しました。

3月4日（土）に研修開講。モンゴル科学技術大学教員、モンゴル科学技術大学とモンゴル国立大学の学生との顔合わせを行いました。ウランバートルから南に約50kmのマンズシール寺院跡に向かい、雪試料を採集しました。

3月5日（日）は野外調査です。4つの班が市内を分担して雪の採集です。

3月6日（月）、採集した試料の調整です。融けた雪試料をフィルターで濾し、固体粒子と液体部に分けました。夜には公益財団法人フォーリン・プレスセンターの赤阪清隆理事長より特別講演「アジアの世紀が来るか」をいただきました。

3月7日（火）、科学技術大学内名古屋大学フィールドリサーチセンターで、前日に濾した融解雪試料の液体部をイオンクロマトグラフィーで陽イオンと陰イオンの定量分析を行い、固体粒子についてはエネルギー分散型電子顕微鏡で観察を行い起源を推定しました。加えて国立大学内名古屋大学法センターにて同センターの概要とモンゴル法について研修を行いました。また、科学技術大学内地質博物館を見学し、モンゴルの地質と鉱物資源について知ることができました。



Gateway to Success in Frontier Asia



3月8日（水）は女性の日で祝日です。学生主体で研修を企画し、郊外の施設見学やゲル訪問などを行いました。

3月9日（木）と10日（金）は、環境に配慮した施設の見学です。風力発電所、地中熱を利用した温室や学校、ソーラーパネル設置工事中のエブリディファーム、ソーラーパネル組み立て工場、エコバス工場を見学しました。10日午後には淡水資源自然保護センターでモンゴルの河川や土壌の環境問題の講義を受けました。夕方に、住友商事株式会社のウランバートル事務所を訪問し、藤原弘人所長からモンゴルでの住友商事の事業を紹介していただきました。

3月11日（土）は、終日、モンゴル日本

人材センターにて最終発表に向けたとりまとめ作業です。翌12日（日）、ひき続きモンゴル日本人材センターにてとりまとめ作業です。午後同センターにて発表会。石橋和紀・理学研究科講師の進行のもと、グループ発表の司会は足立 守・特任教授にお願いしました。発表内容は多岐にわたり、例えば環境配慮型ストーブの提案などがありました。根本二郎・経済学研究科教授から修了証を各自に渡していただき、研修は終了です。

3月13日（月）、早朝、ホテルを出て空港へ。名古屋に向かいました。

（高橋裕平）

履修生から：モンゴル研修の感想

2017年春の研修は、モンゴルの環境研修に参加しました。長年大気汚染に悩まされている背景があることから、今回の研修でウランバートル市の環境評価を行いました。これは私にとって、今までで最も印象的なものでした。それは以下のような理由からです。

私はインドで生まれ育ち、現在は日本で勉強しています。そして今回、モンゴルに行く機会を得ました。どの国でも環境汚染は大きな問題です。私は幼い頃から本を読み、この問題を学んできました。

この研修では、環境が私たちの体にどれほどの被害を与えるかを、自分の目で見ることができました。収入が少ない人（特にゲルに住んでいる人々）にとって、エネルギーはとても貴重なものであることを知りました。冬になると私たちは、当たり前のように、暖房に莫大な量の電気を使用しています。しかし、モンゴル

（第4期生 国際言語文化研究科 アルン クマル シャルマ）



では暖をとるために石炭を燃やし、大気を汚す。そのことが衝撃的でした。

このように、10日間の研修を通してモンゴルの環境問題を学びました。現地の学生とともに、環境問題の原因を明らかにし、持続可能な取り組みを考えました。同時に、モンゴルの伝統、習慣、考え方など、後世に受け継がれるべき側面についても深く学ぶことができました。

ラオス2017年春研修 ～「ラオスの人たちの幸せ」を考える～

登龍門第4期生春のラオス研修は、2月22日(水)から3月3日(金)までの10日間、履修生6名が参加して実施されました。今回の研修テーマは「ラオスの人たちの幸せ」で、ラオスで暮らす人たちが感じる幸せとはどんなものなのか、グローバル化する世の中でこの幸福をどうやって維持していくのか、といったことを、ラオスを肌で感じながらラオス人学生を交えたグループで議論を行いながら皆で考えました。

現地研修に先立ち、履修生は2度の講義を受け、出発直前には名古屋大学のラオス人留学生の前で事前学習結果を発表し、コメントをもらうといった事前準備を経て現地に向かいました。ビエンチャン到着後、ラオス人学生を交えての導入ワークショップから始まり、ラオス日本人材開発センター(LJI)訪問、LJI副所長のPhanhpakit Onphanhdala氏による基調講演がありました。その後はラオスの古都ルアンパバンに移動して、青年海外協力隊が活動しているルアンパバン県病院とルアンパバン子供文化センター訪問、不発弾処理を行っているUXO(Unexploded Ordnance) Laoのルアンパバン事務所と実際に不発弾を爆発させて処理を行っている現場への訪問、同地で活動する青年海外協力隊員および不発弾処理のJICA専門家との夕食会と行程が進みました。ビエンチャンに戻ってからも、近郊のドンクァイ村でのホームステイ、同村での健康や幸福、旅の安全を願うバシーの儀式への参加、日系の安全靴メーカーLao Midori Safety Shoes社の工場訪問、そして中間発表、グループごとに分かれてのフィールド調査、追加調査と続き、最終発表会を迎えました。

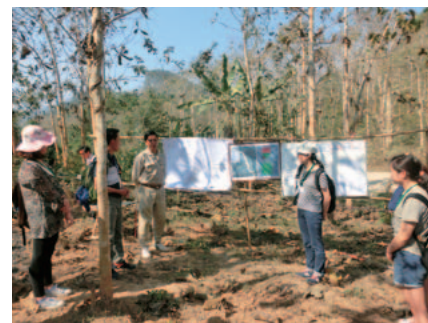
最終発表会では、LJIのBounlouane Douangngeune所長、鈴木康次郎チーフアドバイザーをはじめ、JICA事務所や履



修生が訪問した豊田通商株式会社などから多くのゲストが参加してくれました。グループ発表と質疑応答終了後、ゲストからは難しいテーマでありながらよく考えてまとめたといった主旨のコメントをいただきました。最後に松中学・法学研究科准教授がコメントを行った後、研修修了証書と記念品の授与、全員での写真撮影を行って発表会は無事終了、その後は場所を移してフェアウェルパーティーへと続き、ラオス最後の夜が終わりました。

本研修では「ラオスの人たちの幸せ」という抽象的なテーマを設定し、そのためにはラオスを奥深く知ってもらう必要があると考え、1泊2日の農村でのホームステイやラオス人の中に深く入り込んでいる青年海外協力隊員やJICA専門家、NPO法人スタッフなどへの訪問や懇談を研修の中に組み込みました。そこで期待された成果は、自己の発想の殻を破り、学生らしい大胆で、他の人間が思いもよらないような発想をこの研修でしてもらい、より広く、高い視野から、大胆な発想と行動ができる人間になってもらう素地を作ることでした。その意味での成果を問うと、抽象的なテーマを如何に具体的な提言に落とし込むかということで、学生はよく考え悩んだ末の提案を行ったといえます。本研修が登龍門履修生の将来に何らかの役に立てば幸いです。

(勝田幸秀)



キャリア形成研修 (東京)

OECD 東京センターでの様子



MRI リサーチアソシエイツでの様子



5月31日(水)、OECD東京センター、MRIリサーチアソシエイツ株式会社のご協力により、職場訪問によるキャリア形成研修を実施し、第1期生から第3期生までの国際機関やシンクタンク業界に関心が高い12名が参加しました。

午前はOECD東京センターを訪問し、村上由美子所長によるOECDの役割・活動や日本のODA実績を含む内容の濃い講義に加え、海外、日本、外資、国際機関など豊かな職業経験にもとづくキャリア観についてもお話いただきました。続いて、樋口厚志副所長より、OECD Libraryのデモンストレーションを行っていただきました。午後はMRIリサーチアソシエイツ株式会社を訪問し、於保ゆりえ氏によるシンクタンク業界や会社・業務内容の説明、質疑応答、職場見学、交流会が行われました。交流会には、若手博士後期課程経験者にも加わっていただき、履修生からの多種多様な質問に細やかで核心をついたコメント・アドバイスをいただきました。

履修生は日々研究に追われ、博士人材として「どのようなキャリアの選択肢があるか」、その可能性を探る機会をなかなか持てずにいます。実際に興味のある職場を訪問し、講義の受講、質疑応答、そこで働く方と交流することで、メディア情報などの座学では得られないものを少しでも感じとってくれていたら嬉しいです。

(野口道代)



Young Initiative Talk の開催

5月20日(土)に第1期生有志による学生自主企画Young Initiative Talk (YIT)を開催しました。YITは、現役履修生と年代的にも近い大学院生らを講師に招き、博士人材が社会で活躍することの意義・課題について考えるきっかけにすることを目的に企画しました。今回は、高知県立大学「災害看護グローバルリーダー養成プログラム」の西川愛海氏を講師に招き、第1期生から第4期生までの計17名が参加しました。2部構成の前半は、災害看護という専門分野を踏まえた西川氏の産学官連携への取り組み、さらに各種活動を通じたキャリア観の変遷についてお話いただきました。後半では、災害発生時における具体的課題とその解決方法を体験的に学ぶ「避難所運営ゲーム」を実施しました。大学院生という立場でありながら積極的に社会に出て、専門性を活かした取り組みに参画してきた西川氏の体験談は、わけても第3期生・第4期生にとっては刺激的だったのではないかと思います。

今回の企画は、西川氏の講演やワークショップの充実度はもとより、学年・大学を越えた交流という観点からも非常に有意義なものになったと思います。本企画の実施にご協力いただいた方々に感謝するとともに、YITのバトンを後輩の人たちが繋ぎ、登龍門の学生活動が一層活発化していくことを願っています。

(第1期生 経済学研究科 鈴木健介)



浜岡原子力発電所への訪問研修

エネルギー自給率わずか6%（2014年）の日本において、資源・エネルギーをめぐる問題について考えることは非常に重要なことです。3月24日（金）、中部電力株式会社のご厚意により、静岡県御前崎市に立地する浜岡原子力発電所への訪問研修が実施され、登龍門履修生16名（第3期生8名、第4期生8名）が参加しました。

浜岡原子力発電所では、はじめに発電所の概要、原子力発電の仕組み、そして浜岡原子力発電所が安全性向上のため取り組んでいることをご説明いただきました。続いて向かった原子力研修センターでは、「失敗に学ぶ回廊」という場が設けられており、過去に起こった事故から学んだ教訓やこれまでに蓄積してきたノウハウを伝承していくために研修に活用している様子が紹介されました。さらに、高さ海拔22メートル、長さ1.6kmに渡り施設を取り囲む「防波壁」や、稼働していない原子炉を実際に見学することができました。

今回の研修を通して履修生は、浜岡原子力発電所が、将来にわたってエネルギー供給するため、「安全性の確保」を前提とした「安定供給」・「経済性」・「環境適合」という目標のもと取り組んでいる事業について理解することができました。また同時に、わが国自身のエネルギー問題についてどのような課題が残されているのか改めて考える貴重な機会となりました。

（田畑 亮）



登龍門プロジェクト成果発表会

3月31日（金）の午後から、第1期生による登龍門プロジェクト発表会が行われました。登龍門プロジェクトでは、登龍門プログラムにおいて修得すべき「自律的提案・解決能力」、「コミュニケーション・マネジメント力」、「国際性と文化への理解」、「異分野理解力」、「ディベート・自己表現力」を発揮し、履修生自身が1カ月程度のインターンシップや研究プロジェクトを計画・実行します。

登龍門プログラムの集大成の成果発表ということで、株式会社東海メディカルプロダクツ会長の筒井宣政氏はじめ、株式会社大垣共立銀行、日本アイ・ビー・エム株式会社、トヨタ自動車株式会社、株式会社日立製作所などの社会人メンターとしてご協力いただいている企業の方々、松尾清一総長、前島正義副総長、履修生の指導教官などにもご参加いただきました。

発表内容は、海外の大学の研究室に滞在し、新しい研究手法への挑戦、インタビュー調査、共同研究を行ったものから、海外で現地の方と協力してラジオ番組をプロデュースしたものまで多岐にわたり、いずれも登龍門で鍛えられた上述のスキルや積極性、独自性の光る発表でした。フロアとのディスカッションも活発に行われ、プロジェクトの内容のみならず、今までの経験や今後のキャリアと密接に関連する形でプロジェクトが実施されたことがわかりました。

（田中瑛津子）



浜岡原子力発電所での様子



登龍門プロジェクト成果発表会での様子



「国際機関への登龍門」研修

登龍門プログラム履修生の卒業後のキャリア形成先の一つとして、国際機関があげられます。昨今、国際機関においても、博士保有者の需要は高まっているものの、大学院修了後すぐに職に就くことは難しく、ほとんどのポストに関して、実務経験が必要とされています。そこで、世界の第一線で活躍する人々と実際にお会いし意見交換をすることで、その後の自身のキャリアパスについて具体的に考える機会となることを目的に、3月19日（日）から24日（金）までアメリカのニューヨークやワシントンD.C.にある国際機関を訪問しました。研修には、将来、国際機関で働く事を希望している、博士後期課程の履修生が3名参加しました。

ワシントンD.C.では、世界銀行や国際通貨基金（IMF）で働く、様々なバックグラウンドを持つ若手職員と意見交換をしました。ニューヨークにおいては、国際連合本部、国連開発計画（UNDP）や国連プロジェクト・サービス機関（UNOPS）を訪問し、インターンシップなど、具体的なキャリアパス形成の議論をすることができました。これらの訪問を通して、参加学生は、国際機関を目指すために必要な英語力や実務経験などを明らかにすることができ、今後のキャリア形成で、それぞれが何をしていく必要があるかを明確にすることができたようです。

（古藪真紀子）

第5期生募集説明会の開催

4月11日（火）の夕方、PhD プロフェッショナル登龍門第5期生募集の説明会が名古屋大学ES館で開催され、57名の学生が集まりました。

杉山 直プログラムコーディネーターの全体説明、根本二郎・経済学研究科教授による単位取得・履修方法の説明のあと、第4期生の田中俊行君（理学研究科素粒子宇宙物理学専攻）と Karl Wilkinson 君（国際開発研究科国際協力専攻、ジャマイカ出身）が本プログラムの特色について、昨年10月以降この半年間に実施された登龍門プログラムでの実体験をもとに分かりやすく説明しました。

田中君は、「将来JAXAで働いてみたい」という登龍門に入る前の漠然とした考えが、最近では「JAXAのプログラムオフィサーとして自分を試してみたい」と、より具体的に将来の夢を描けるようになったと語りました。Wilkinson 君は、登龍門の学生になれば、「世界各地で異文化体験ができる」、「原子力発電所の中に入ることできる」などと魅力について話し、「登龍門に来て一緒に勉強しよう」と情熱的に語りました。

説明会に参加した学生からは、登龍門プログラムの延長の可能性、受験資格などについて多くの質問がありました。この説明会を経て、書類選考と面接により13名が第5期履修生として合格となりました。

（足立 守）



女性リーダーにインタビュー

名古屋大学を卒業後、日本アイ・ビー・エム株式会社に入社、システム・エンジニアとして企業のITシステムの構築や業務開発、運用などに従事、ここ数年はネットワーク、クラウド、セキュリティ関係のシステム構築や業務開発、運用支援、また社内の情報セキュリティ推進などの業務でも活躍されている我妻三佳氏にインタビューさせていただきました。

(インタビュアー 野口道代)



日本アイ・ビー・エム株式会社
我妻三佳執行役員

ー トップリーダートーク*を通じた履修生の感想と期待すること

普段接している新卒入社の方と比べると、はるかに積極的な印象があります。質問や意見を述べる態度から、色々な事を吸収しようという気持ちが伝わり、将来が頼もしいです。社会での活動に期待と不安があり、相対的には期待が大きく、この先どのように活躍したいかモチベーションを高く持たれていることかと思います。まだ実感はないかもしれませんが、企業など一般社会では仕事は選べないことも多く、楽しいことや面白いこと、最先端をいっているなど、よいイメージばかりでなく、地味で泥臭いことも多いです。そういうことも含め、様々なことへの適応力が求められると考えます。

ー 社会に出てからの失敗談と対応

入社間もないエンジニアの頃、プログラム作成でなかなか解決できない問題に直面し、誰にも相談できず、期限にはなんとか間に合いましたが、前日深夜まで苦戦した思い出があります。他には、お客様との席で、自社の考えで話をしがちな態度がお客様の逆鱗に触れてしまい、出入り禁止になったことがあります。その方が責任者である間は許してもらえず、何年か経って別な席でお会いした時にようやく許していただけました。仕事上、テクノロジーの進歩とともに新しいことに取り組む機会も多く、失敗も多数経験しましたが、打たれ強いこともあり、めげずに、その経験を踏み台にして成長してきました。

ー ライフイベントに人生が左右されがちな女性の仕事への向き合い方

女性が働くための制度が整ってきたなかで、女性もプライベートイベント以外で、仕事に限らず、趣味やその他で自己実現できるものを持って、社会参加の方がよいと考えます。仕事は自分のペースだけでは回らず、残業や出張もあるため、家族の理解に加え、本人が「絶対やりきる。頑張るぞ」という強い意思を保つことが大事だと思います。ただ、自分ひとりで何でも抱えないで、楽観的に考え、助けてもらいたい時は「助けて」と言えるぐらい大胆な図々しさを持つことも必要です。

ー 大学の先輩として、後輩である学生、特に女子学生へ向けたメッセージ

色々なところで「名古屋大学」出身者が活躍していること、名大卒というだけで繋がりができることを誇りに思っています。また繋がりをどんどん広げて、そのネットワークを活かして欲しいです。世の中うまくいかないことも多いので、少々のことではへこたれずに頑張れる粘り強さが必要で、こうありたいという目標や目的意識を持つとよいと思います。この意識があれば、自分が不足していることに対して「努力」できますし、そのような意識を持ち実践していくと、結果がついてきたり、自分の思いが通じたりして、実社会でも生き抜いていく自信がつくのではないかと考えます。また、女性リーダーが少ない日本で、女性は男性リーダーのようになろうとして虚勢を張りがちですが、私はその発想には反対で、自分なりの自然体なやり方で女性の特性を活かして頑張りたいです。

*産官学の各界トップリーダーの体験をロールモデルとして学び、ディスカッションを通じてディベート力、自己表現力、コミュニケーション能力を高めるために開講している。



名古屋大学
NAGOYA UNIVERSITY

Message from Students

● 専門を超えて活躍する博士人材になるために



医学系研究科 総合医学専攻（第1期生）／押野玲奈

社会に数多くある多様な課題を解決するためには、博士の持つ、現状を分析し課題を見つけ、その解決策を模索し実行するという能力は必須です。登龍門プログラムではその能力を高める訓練に加えて、専門を超えた広い社会を見せてもらいました。修士の頃は産学官各界を先導してきたリーダーたちの話を伺ったり、自分の専門と直接的な関わりのない社会問題について、他分野を学ぶ学生と本気で議論したりという経験を積ませてもらいました。研究室で時間を過ごしているだけでは見ることのなかった広い世界を体験させてもらうことにより、自分の専門だけに限らない幅広い社会問題を解決する活動に関わりたいと思うようになりましたし、課題発見・解決能力および多様な背景を持つ人々とのコミュニケーションスキルを磨くことができました。その集大成として、産学官各界で活躍する女性博士取得者と全国のリーディング大学院に所属する女性院生が一堂に会し「女性のライフイベントと博士人材として活躍すること」について議論するというイベントを開催することができました。沢山の学びと実践の場を提供してくださった登龍門プログラムに心から感謝していますし、プログラムで培った能力を活かして、自分の専門を超えて社会問題を解決していける人材となるために残り2年間も努力していきます。

● 広い視野を持つ知識人になりたい

文学研究科 人文学専攻（第4期生）／桑 忠林

私は登龍門プログラムに入る前から、研究者になることを目指していました。その理由は若者との交流も多く、好きな研究ができるからです。これより理想的な仕事は存在しないだろうと思いました。しかし、登龍門に入ってから、その考え方に変化がありました。初年次のカンボジア研修で、とある村の教室の数が一部屋しかない学校に訪問しました。そこでは小学生と中学生が同じ教室で同時に授業を受けていました。また、今年3月、モンゴル研修でウランバートルへ行きました。毎日見られた綺麗な空は、冬の時期、あまり見られませんでした。それらの問題を見て、自分がやるべきことはなんと多いことだろうと痛感しました。言語の研究は主に文法と意味の研究です。大学での研究者として以外にも、会社で言語理解の技術開発に関係する基礎研究に挑戦したいです。また、国際機関やNGOに入って、人々を援助できればと思います。これまでに経験した2回の海外研修、週1回のトップリーダートーク、その他の様々なトレーニングのおかげで、私は自分の能力が高まったと同時に、視野が広がったことを感じました。「PhD プロフェッショナル登龍門第4期生」として、その名に恥じることなくきょう勇氣ある知識人になれるよう頑張ります。



登龍門通信

2017年8月31日／第8号

編集・発行：名古屋大学 PhD 登龍門推進室
東山キャンパス 理学部 C 館3F 319号室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL : 052-789-5717
E-mail : 10ryumon01@adm.nagoya-u.ac.jp
<http://www.phdpro.leading.nagoya-u.ac.jp>